

県外避難者としての訴え

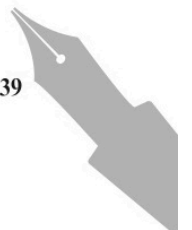
「私たちが 忘れないで……」

震災以降、県外避難者の会は精力的に活動をしていましたが、震災の風化は確実に進んでいました。

神戸に戻りたいという気持ちはあっても、県外避難者には十分な情報が届いていませんでした。

「仮設住宅にいるものだけが、被災者じゃない。県外に取り残されている被災者もいるんだ。」

と、公夫さんはことあるごとに訴えてきました。



西田 公夫 無職 71

貴重な情報源となります。

(愛知県西春日井郡) 阪神大震災の被災者の私には、本紙朝刊「一週一話」の「仮設住宅の暑い夏」は、人ごことは思えず、興味を持って読みました。また三重県松阪市にお住まいの村田久美さんの二十日付本欄「震災後の深い心の傷を痛感」を読み、風化がささるやか

震災記事のせ 風化を防いで

れている今日、なお震災に関心を持ち、被災者たちに心を寄せられる方がおられたことを、心強く思っています。

知る手だてを持たぬ私たち移住者には、折に触れて掲載される震災の記事は、

が、その実態は三分の一ほどしか把握されていません。幸いにも今、他府県へ避難された方たちの実態を調査し、支援していくという運動が起こり、この愛知県でも名古屋のボランティアグループが、活動の基盤となる組織づくりを奔走されています。

エゴでしようか。

1996. 夏 中日新聞

希望のメッセージ

避難いつしか3年に
公営住宅の、第四次一元募集の抽選にも外れ、「故郷は遠くにありて想うもの」の歌詩が、痛い程胸に突き刺さりました。

一時的な避難のつもりが、なぜか、世間から見捨てられ、いつしか三年が経ちました。

望郷の念を胸に秘めながら市井の片隅で、慎ましく暮らす県外被災者達。いつも日陰を歩かされてきた私達にも、陽光の燦々と降り注ぐ、明るく温かい住居が恵まれるよう、希望のメッセージを送り届けて下さい。

現在「りんりん愛知」と名付けた、県外被災者の会をつくり、一日千秋の思いで帰郷できる日を待ちながら、頑張っております。

兵庫県内の被災地の詳しい情報が手に入らないので、困っております。

1998. 1 出典不明

**「被災者のくせに大きな顔をす
るな！」 「被災地へ帰れ！」**

理不尽な雑言を浴びせられた被災者がいるとの噂を耳にし、「まさか？」とは思いましたが、似たような言葉を貰った経験のある私には、「嘘だ」と否定し切れないものがありました。

当時、極度の情報不足の中で、被災者相互間の連絡手段すら持たなかった私には、その真相を確かめるすべもなく、遣り場のない怒りに身も心も苛立つばかりでした。

愛知県にも相当数の被災者の方が避難されていると聞き、何とか連絡を取りたいものと、事あるごとに県外被災者の実態調査を訴えてきましたが、行政もマスコミもプライバシーを理由に被災者の住所などの情報は教えてはくれず、個人の力の限界を知り、深い挫折感を味わいました。

それから一年経った今春、多くの人々の尽力により念願の被災者の会の誕生を見ることができ、今後より多くの人達の参加を願っていますが、今なお、被災地の自治体は被災者の住所の公開を頑なに拒んで止みません。これは一体、何を物語っているのでしょうか。

世間では震災は確実に風化していますが、県外被災者の震災はいつ終わるのでしょうか。

東山 健男さん（仮名）
愛知県 72歳男性 無職

1997. 7. 15 かみひこうきプロジェクト

震災ですべてを失った私は、当夜身を刺すような風の吹き込む建物の片隅で1枚の毛布に妻と共にくるまり、余震に脅え寒さに震えながら眠れぬ一夜を明かしました。

その折り、隣に座っていた1人の老女が「うちのおじいちゃんア、まだ埋まったままやねん。呼んでも返事なかったさかい、もうあかんやろなア」と誰へともなく呟かれた言葉が、2年半も経った今でも耳の奥底にこびり付いています。

また目を閉じれば、地獄絵図のような当時の惨状が鮮明に蘇ってきます。しかし、現実の世間には震災の事は記憶すらなく、確実に風化しています。

そうした世情の中で支援団体に恵まれ、県外被災者の会「りんりん愛知」を発足さし得たことは幸せと言わねばならないでしょう。事実、県外被災者の会を作りたくても支援者がおらず、また支援しようにも被災者の住所が判明せず難渋している所もあることを知って下さい。

被災地の自治体は一刻も早く被災の幕引きを目論んでいます、県外被災者には震災を終了させる目途は全く立っていないのです。全国の皆さん、県外被災者に対して尚一層の暖かい支援をお願いします。

東山 健男さん（仮名）

1997. 8. 31 かみひこうきプロジェクト

かみひこうきプロジェクト：阪神・淡路大震災から現在に至るまで、全国で発生した災害の被災者から、今の暮らしや心境など「生の声」を募集し、インターネットを使って被災地外に発信しているプロジェクト。このプロジェクトでは、公夫さんは東山健男というハンドルネームを使っていた。

尾張の国から

「92になる母が元気な間に神戸に連れて帰ってやりたい、思っています。」

「帰りたい帰りたい言うと思った神戸の土、踏むことなしに、主人、逝ってしまった。」

沈痛な面持ちで語る被災者達に、私は、慰める言葉もなく黙って頷くばかりでした。

仮設住宅の早期解消を目論む自治体は、公営住宅の当選枠を市街地で県住で100%、市住80%を仮設優先としたので、私達は残りの20%に殺到することとなり、余程の僥倖に恵まれない限り帰郷の望みは叶えられませんでした。因みに、昨年秋の第四次一元募集に応募した者全員が落選の憂き目に逢い、故郷が一層遠退いたと嘆いておられます。

震災に遭い止むを得ず県外へ避難された人の数は17万とも称されましたが、実態調査はなされず今もってその詳細は把握されておらず、3年経った現在なお5万有余の人が、望郷の念を胸に秘めながら市井の片隅で慎ましく暮らしておられます。

震災当初から行政側は「県外へ出た者はめぐまれている。」と公言して憚らず、不十分とはいえ被災地では施行された救援策も、県外の私達には全く適用されず、それどころか長期に亘って世間から見捨てられ、放置される始末でした。

両方の自治体から無視されるかたちとなった私達は極度の情報不足に陥り、最後の義損金の支給や、住宅の一元募集も知らずにいた人も現れました。また「被災者のくせに」との理不尽な言葉を浴びせられたと言う風聞や、謂れのない差別を受け涙した者がいるとの噂を耳にしても、

それを確かめる術を持たなかった私は、苛立ちを募らせるばかりでした。このような有様を見聞きされた作家の小田実氏が、「棄民政策だ」といみじくも喝破されましたが、それは当時の私達の境遇を端的に表現されたもので、正しく当を得た言葉でした。

そのうち、この実情に気付いた人達が県外被災者の組織づくりに立ち上がり、大阪を中心に運動の輪が広がって行きました。愛知県においてもボランティア達が、率先して組織づくりに取り組まれましたが、肝心な名簿作りに協力を要請した行政側が、プライバシーを理由に、県外被災者の住所の公表を拒否したので、運動は難渋を極めました。若し人達の粘り強い運動のお陰で、3年目の春、県外被災者の会を誕生させることができました。

集った人達が一様に口にされた言葉は、「土地に馴染めず話し相手ができない」でした。そして、眼に涙を浮かべながら夢中になって関西弁で喋られた姿は、終生忘れ得ないでしょう。

震災が風化して行く昨今、被災者の支援を続けるボランティアは、「まだそんなことしているのか」と周りから揶揄され、巷で震災の話をする、「昔のことを」と白眼視されます。

遠からず仮設は解消され復興宣言がなされるでしょう。そして私達は自身の震災の終焉を待つことなく、人々の記憶から消えて行きます。私はそれを恐れるとともに、今後いかなる災害が起きようとも、私達のような存在の者を決してつくらぬよう、声を大にして訴えます。



絵筆とペンと過ごした日々 ～公夫さんが伝えたかったこと～

過日、愛知県女性総合センター「ウィルあいち」で「ふるさとひょうご交流会」が催され、県外被災者20数名の参加を見ました。

最初のうちは、被災者を2年間も放置してきた行政への不信感からか、きつい口調の言葉も聞かれましたが、時の経過と共に、県から来られた人達にも同県人としての親しみが湧き、被災者間には同じ境遇の者という連帯感が生まれ、初対面の垣根も取れ和やかな歓談に終始しました。和気あいあいのうちに終了し再開を約して帰途につく被災者達の表情には、満ち足りたものが見られました。

不満の捌け口もない生活に耐え、一日千秋の思いで帰郷の日を待ち望む人達の心情に思いを至した、差別のない施策が望まれます。

(愛知県 K. N 男性 70歳代)

1997.5 ひょうご便り第4号(兵庫県阪神・淡路大震災復興本部 生活文化部生活復興局生活復興推進課)

被災地を一步でも離れると確実に震災の風化が伺われる世情の中で、「県外避難者の支援を考える連絡会議」が西宮市の県立総合体育館で開催されました。

周囲から「まだそんなことを・・・」と揶揄されながらも被災者の支援活動を続けておられる人達が、被災者の会の数を遥に上回るほど参集されたのには、感動しました。また、県政の中枢に在る人たちも参加され、有意義な議論が活発に交わされたことは、昨年までの県外被災者への対応が棄民政策と酷評されたのに比べ、大きな進展といえるでしょう。お互いに同県人との認識のもとに叡智を絞れば、最善の結果が得られるものと信じます。

(愛知県 K. N 男性 70歳代)

1997.8 ひょうご便り第6号



「ひょうご便り」：兵庫県が、阪神・淡路大震災の県外被災者向けに発行してきた定期情報紙。必要な情報をまとめ、全国の地方自治体の広報紙を通じて希望者を募りながら発送した。公営住宅の申し込みや各種の貸付制度、相談窓口などの支援情報を提供。さらに被災地の様子を知らせるため、変わりゆく街並みの写真や地域住民のレポートを掲載した。1996年12月から2005年3月まで発行された。

「イヤァ、お久しぶり、どないしてはったん」「ウン、元気しとったでェ」、催し事はそっちのけで関西弁でのお喋りに夢中になっている人。最初の茶話会以来の邂逅だと言われる人もおられました。

去る8月9日、「神戸Y支援チャリティコンサート実行委員会」の人の発案で「With You あいち」、「YWCA」の皆さんとともに夏祭を開催しました。腕によりをかけて作られた珍味の並ぶ模擬店では、地ビールのコップを傾けながら、早やご機嫌になっている人。ミニコンサートで、今様の音楽演奏に判った振りをして、頷きながら拍手を送る人。スイカ割りで周りの人の助言を頼りに力一杯床を叩き、爆笑の中に目隠しを外す人。人の輪に入り、手振り、足振りが他の人と違うのも気づかず、踊りに興ずる人。ミニバザーで「ただ」の次ぐらいの値札を見て、思わず衝動買いをする人等々、凝らされた趣向に午後の一時は瞬く間に過ぎ、久しぶりに童心にかえり日ごろの憂さを発散させ、再会を約して帰路に着く人たちの表情には、満ち足りたものがありました。震災のことは確実に風化したと言われる世情の中で今なお被災者を気づかはれる人のおられることにここから感謝しております。

(愛知県 K. N 男性 70歳代)

1997.10 ひょうご便り第7号

10月18日、公営住宅の第四次一元募集の説明会会場には、緊迫感がはり、一種の悲愴感さえ漂っているように見えました。それは、昨今、第四次で募集は打ち切りとの噂が流れたので、県外居住被災者たちは、この機会を逃すと、帰郷できなくなるとの危機感をいだいていたからに外なりません。

第一次募集から今回までの全てが仮設優先の対応で、軽視された県外居住被災者の中には、行政をうらむ者さえ現れています。

しかし、神戸から派遣された職員の懇切丁寧な説明に、その噂は杞憂にすぎなかったと分かり、一様に愁眉を開きました。

個別相談の頃には笑い声さえ聞こえ、終わって、帰る人たちの表情には、嬉々としたものが伺われました。日頃のうっぷんを吐き出し疑問も氷解し、今度こそはとの確信でも待たれたのでしょうか。

その様子を見た私は、被災者の会を結成してよかったと、心底より思いました。

(愛知県 K. N 男性 70歳代)

1997.12 ひょうご便り第8号



帰郷

「ようやく戻れる」

1998年7月、西田さん夫婦は神戸の復興住宅の第三次一元募集に応募し、当選。念願だった神戸に帰ることになりました。愛知県に引っ越してきて、3年と3ヶ月が経っていました。

引っ越し先は神戸市北区しあわせの村。シルバーハイツといって高齢者用のマンションでした。

やっと神戸に帰れる、それはとても嬉しかったのではないのでしょうか。

名古屋で出会った人々もいたので、どこか後ろ髪をひかれる思いもあったようですが、この頃の記事を見ると、嬉しさとこれからの生活への希望に溢れている感じが見受けられます。

待ちに待った愛するふるさとへの帰郷でした。

阪神大震災の県外避難者の中には近畿圏を遠く離れて住む人も少なくない。言葉や習慣の違う異郷に投げ出され、孤立感はひときわ深い。そうした中で古里への思いを募らせる人、新たな生活を誓う人、それぞれに厳しい選択を余儀なくされている。

「神戸に戻っても、以前とは人も街も違う。思い出を頼りに帰ったとしても失望するだけでしょう」。神戸市長田区から、知人の紹介で神奈川県横須賀市の市営住宅に移り住んだ殿待好俊さん(61)は定住の決意をこう語る。

妻の厚子さん(53)とともに入居して一年半。「知らない土地に引っ越すのは絶対に嫌」と厚子さんは反対したが、「ともかく落ち着く場所が欲しい」との思いから、新生活に踏み切った。

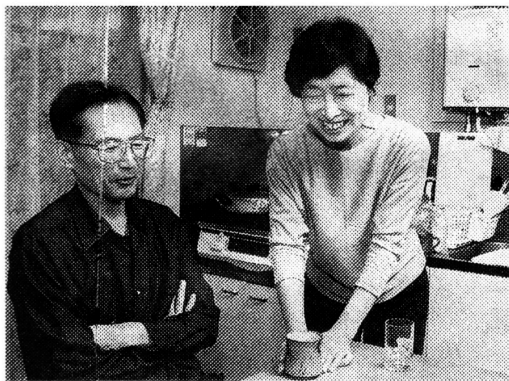
長田には、「ちょっと出てきいよ」の一言で互いの家を行き来するコミュニティーがあった。厚子さんは「干渉し

震災 今

<第6部>

県外避難者の苦悩 ㊤

定住・帰郷、手探りの選択



あわないのが都会の生活。分かっていけば、いつかは報わかつてはいるけど……」と今も故郷に思いをはせる。

殿待さんは自治体関係の職場で、厚子さんは飲食店で仕事に就くこともできた。「ほ

あわないのが都会の生活。分かっていけば、いつかは報わかつてはいるけど……」と今も故郷に思いをはせる。

殿待さんは自治体関係の職場で、厚子さんは飲食店で仕事に就くこともできた。「ほ

に逃れて三年。長かった。避難生活もようやく終わる。転居した年、地元の人入ったが、「入会しただけで友達」。

横須賀に移り住んだ殿待さん夫妻は定住を決めた

8割が兵庫復帰希望

兵庫県が県外避難者一万人を対象に九六年末に行った調査では、約八割が県内に戻ることを希望、「現在の場所です」の回答は約一割だった。「戻りたいが戻れない」との答えは回答者の約四割に上り、戻れない理由としては約七割が「住宅」を挙げ、「経済的理由」が約一割だった。県外での住居形態では「民間賃貸」が約五割、「公的賃貸」は約二割だった。

るかを思い知る日々だった。「自分たちには昨日のこのようなのに」。無念さから地元新聞への投書を続け、それをきっかけにボランティア団体に入会、被災者交流会、友人もできた。

愛知での生活も残りわずか。また一から生活を立ち上げる不安も強い。「後ろ髪を引かれるようです」。西田さんの心中は複雑だ。

例会報告

被災者は県外にもいるんや！！

～西田公夫さん ありがとう！～

レポート：阿部匡成 Kuninari Abe
(LiFe 編集委員会)

総会と同時開催となった12回目となる例会は、県外避難者の会「りんりん愛知」の代表を務められた西田公夫さんのお話を聴きました。この3年間「震災の語り部」として、私たち震災から学ぶボランティアネットの会のみならず、様々に活躍されてきました。
このたび神戸市内の公営復興住宅に当選され、3年ぶりに帰郷されることとなり、今の心境を伺いました。

まず「神戸の情報は、名古屋には届かなかった」ので、非常に不安な日々を過ごしたと、話されました。それは、震災の恐怖もまだ癒えぬ頃、知らない新たな土地での生活への不安に追い打ちをかけたことでしょうか。「仮設住宅の住民ばかり取り上げ、県外へ避難した人々については無視した行政・マスコミ」の対応は、県外避難者の帰郷したいという心情さえも無視したものとなってしまいました。「これからいろいろなところで災害が起こるでし

う・・・。そして住みなれた土地を離れる人もいることでしょうか・・・。でも、県内に残っても、県外に避難しても、同じ被災者を平等に見てほしいのです」と語られる西田さんの表情には、感情を超えた何かが、言葉には出来ない何かが溢れていました。
西田さん。この3年の間、本当にお世話になりました。この誌面をかりて心から御礼申し上げます。暑い夏がやってきましたが、どうか御元氣過ぎしてください。

1998.7 震災から学ぶボランティアネットの会ニュースレター「LiFe (リフェ)」

発言

20%枠当たり
神戸に戻れた

西田 公夫 72歳
(無職 神戸市北区)
住宅募集は仮設優先で、県外被災者等への割り当ては10%以下の中で当選です。から、まさしく幸運としかいようがありません。
帰郷して日々重なるうちに、心置きなく関西井でしゃべる自分に気がつき、また関西井の中に浸ることで、心に大きな安らぎを得られることを知り、改めて驚いておりました。移住先の八百屋で「りんりん愛知」のメンバーとして活動して、店で「やっとかめ」(お久しぶりの感)とこれ面喰った。

1998.夏 神戸新聞

西田 公夫 73歳
(無職 神戸市西区)
震災後、転居していた愛知県で、親しくなった人たちと「歩こう会」なるものをつくり、名所旧跡などを訪ね歩いていましたが、このほど念願の神戸に帰ることができませんでした。
夏の間は、引越越し荷物の片付けに追われたり、体調を崩したりして歩く機会もありませんでした。生

活も落ち替きた季節も運動に最適な候ともなれば「歩き好きの虫」が動きだします。そこで手始めに近くの「あわせの村」のジョギングコースで、散り敷く落ち葉を踏みながら、思わぬ鳥の鳴き声に迎えられて、散策を楽しんでいます。ただ肺に欠陥のある私には、それでも私は体が動く限り、マイペースで歩き続けようと思っています。

1998.12 神戸新聞

絵筆とペンと過ごした日々 ～公夫さんが伝えたかったこと～

1998.9.15 県外避難者支援全国ボラ
ネット・りんりん「りんりん」

引 つ越しの時には、神戸の「引つ越しプロ
ジェクト」の皆さんにお世話になりました。名古屋のボランティアの人達が10数人、
手伝いに来てくれたのは嬉しい予想外でし
た。お礼のこともありません。《孫》にな
つてくれた名古屋の女子大生とは文通を続け
ています。
帰って来たある日、「この仮設から来たはっ
たん？」と聞かれ、「仮設ちやうねん、愛知県
から帰って来てん」と答えると「へえ、なん
で？」と怪訝そうな面持ちでした。この人だけ
ではありません。それとなく聞いてみますと
「県外避難者」についての認識はほとんどの人
にないようでした。啓蒙活動をしなければ、
妻と冗談を言っております。
神戸市灘区、愛知県、神戸市北区 西田 公夫
復興住宅に同居しているのは仮設の人だけでは
ないのに、西田さんご夫妻の啓蒙(?)活動
に期待しております(編)

10月24日の朝日新聞に、兵庫県知事選に関し
て「りんりん」の中西光宇さんのことが載
っていたからと云って、このシルバーハイツに
常駐しておられるISA(生活援助員)の方が、
その記事を切り抜いて持ってきてくれました。
中西さんの談話の下に神戸市東灘区で独り暮
しの小谷さかゑさんのことが出ていました。彼
女は、私が罹災した灘区大石北の同フロック
(隣保)で被災され、岡山のほうへ移転されまし
たが、私の妻の友達であり、また地区の老人ク
ラブの仲間でした。
驚いた妻は早速、小谷さんに電話を入れました
が、彼女は新聞に載ったことを非常に喜んで
おられました。
このシルバーハイツは、現在97所帯が入居し
ておられますが、県外から帰ってきたのは私達
だけです。県外避難者の話をして全く噛み合
いません。
ここは第3次一元募集の時には、交通の便が
悪いと云うことで、穴場だったようです。何度
も抽選に外れていた高齢者に「あそこは穴場だ
から申し込め」と役所の人に云はれた、と語る
人が何人もいます。
今、神戸市内に何ヶ所かシルバーハイツが建
てられていますが、「いいのいい姥捨て山や」と

云う声も聞こえてきます。それが妻かどうかは
今後の行政のやり方次第で証明されますが、
私達自身も「決して姥捨て山にはしてはならな
い」との決意で自治会の運営に当たらねばと思
っています。
幸い、自治会発足以来、多くの福祉関係の人
やボランティア達から、住民の親睦をはかるた
めの行事の申し出があり、絵手紙、雑物教室が
実施され、料理教室、大正琴、小物作り教室な
どが予定されています。
しかし、何と云っても多くの人を集めるのに
はふれあい喫茶に勝るものは、今のところあり
ません。無からの出発ですから、係の人は苦勞
したことでしょう。カップなど50コ程集まった
とか聞き、全員が被災者なのによくぞと紙が驚
いております。
10月27日の神戸新聞に私達の「ふれあい喫茶
の記事がかなり大きく載っていました。読んで
もらえたでしょうか。この記事を見たと言つて
垂水区の人が新聞社を通じて「カラオケ」のセ
ットを一組寄贈されました。有難いことと感謝
すると同時にマスコミの力の偉大さに改めて感
心しております。
今後ともよろしく、お元気です。
神戸市北区 西田 公夫(73歳)

1998.12 県外避難者支援全国ボラネット・りんりん「りんりん」

私 が愛知県へ転居してからは、不思議と多くの
有益な出逢いがあり、県外避難者としては恵
まれた日々を送ることができました。これも偏に
りんりんの支援の賜と感謝しております。
「新聞見たよ」の声に励まされましたが、
その言葉も聞けなくなるかと思うと胸が詰まりま
す。思いは尽きません。本当にありがとうございます。
ました。お元気で御活躍下さい。
神戸市 西田 公夫

1999.3 県外避難者支援全
国ボラネット・りんりん「り
んりん」

市外・県外避難者ネットワーク	
りんりん	
発行：県外避難者支援全国ボラネット・りんりん 〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目24-12-10 TEL. 06-443-3808 FAX. 06-449-8204	
鳴り響く 音が 心の 鐘	

「りんりん」：県外避難者の自助グループ「市外・県外避難者ネットワークりんりん(事務局・大阪府内)」の愛知県のグループ。公夫さんご夫妻は、「りんりん愛知」のメンバー。

友の会の励ましに 支えられて

震災後、事情があつて郊外へ転居し、再度、帰郷することは難しいと諦め、空虚な日々を送っていた矢先、当時所属していた東灘友の会の方から、旧のTEL番号を手繰って探し当てたと言つて電話があり、「離れていても友の会の皆が応援しているから決して孤独やなんて思わんように」との激励の言葉をいただきました。

「忘れられていなかった」と言う喜びが胸中に漲り、落ち込みがちだった私に再生への勇気を与えてくれました。

その後は多くの出会いに恵まれ、県外被災者としては幸せな道を歩むことができましたが、これもその東灘友の会の方のお陰と感謝しております。

1999.11 兵庫県高齢者放送大学
放送大学テキスト第7号

